

SAILING

NEWSLETTER

Hatsushima Double Handed Race 18th

2006年6月24日逗子マリーナヨットクラブ主催の初島ダブルハンドレース、Zephyr 2007はCクラス2位と初の入賞を果たしました。

初島ダブルハンドレースを主宰する立場にいる私達は勿論第1回のレースから関わってきたが、最初の頃は運営が中心で必ずしも参加してはいなかった。初島ダブルハンドレースの前身は逗子マリーナヨットクラブが出来てまもない頃、クラブレースとしてナイトレースをやっていた。あるとき酒の席でダブルハンドでのオープンレースにしてみたらという話しが盛り上がり第1回のダブルハンドとしてはじまった。土曜日の夕方スタートで西の空の夕日をバックに参加艇が初島に向かっていった姿を思い出す。それから参加艇も徐々に増え、週休2日も定着してきたので土曜日の朝のスタートに変更された。ナイトレースの時は伴走艇などをしてきたが、その伴走艇が網にかかったりして鬱鬱だった。

朝のスタート になって参加も可能になり、参加を続けてきた。最初

は今から考えるといい加減なものだった。

雨が降ったら出るの止めよう

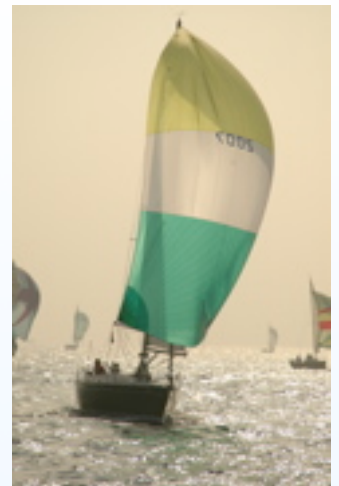
とか、途中で微風でフィニッシュ

が危うそうだと、走ってタイムリミットにひっかかるくらい

だったら決断が早い方が良い

などとかってな理屈でリタイヤする

ことも多かった。それが年を追うごとに少し



初島ダブルハンドレース
毎年6月の最終土曜日に開催されるレースで、逗子沖から相模湾の反対側熱海沖にある初島を通常4人から10人ほどで乗るヨットを使って2人で回ってくる全長46海里(82.8km)のレースです。



こと

ずつだが真剣になってきた。レースのパーティーで常連の参加艇の女性オーナはダブルハンドレースに出場するのにレースが近づくと家のことはより完璧にこなし文句が出ないようにするのだそうだ。勿論レース海面の上でも真剣そのもの。仲間と握ることもある、のろまのゼファーと言われていた私たちは、サエラにレーティング以上のハンディキャップをもらっていんだこともあった。そうこうしながら段々真剣にレースをするようになる。そして真剣にやればやるほどレース結果をみてくやしく感じる。

一昨年直腸癌の手術から完全復帰をする目標のひとつとして術後2ヶ月半のこのレースを選んだ。結果は我々の整備不良からヒールした時にトイレの流しから逆流して海水が風呂桶3杯ぶんほど浸水して、レースをまともに続けられなくなった。リタイアも真剣に考えたがクルーの服部も私のそのレースにかける意気込みを知っていてくれたのだろう本当にぶっ倒れるまで浸水した海水を汲み出してくれた。

去年は微風のスタートから、風が上がり、オーバーヒールが来そうな登り、初島を何とか回り、後半は豪快なアビーム走行となった。クラス5位、4位とは修正で10秒差、3位とは621秒差だった。この差を縮めてなんとか入賞したいものだ。

2006年ダブルハンドレース

2006年6月24日の朝は4時にカトリアで起床した。前日の朝、ワールドカップの日本対ブラジルの試合が4時からあり、おかげで早寝早起きが出来た。余裕をもってシャワーで汗を流し、ストーマ(人口肛門)のセットアップもしっかり準備した。早朝からのレースは普通のヒトは排便時間がとれずに大変だろう。長丁場のしかも二人だけ乗るレースな



のでなんとか出航前に用をたしておきたいだろうけど、ストーマになった私は極めて気楽だ。出ても貯められる袋もっているし、沢山溜まった時の排出だって船の上なら健常人よりよっぽど簡単。

クラブハウスに移動してコミッティーがレース準備にあわただしいのをよそ目にサンドウィッチをつまんだりコーヒーを飲んだりゆっくりテンションをあげる時間があった。コミッティーを送り出してもクルーの服部は今回のダブルハンドの事務局長しているのでまだ資料などプリントアウトしている。船の準備は前日に彼が

しっかりしてくれているので、すぐ出航出来る状態になっている。1週間前に交換を依頼したジブファーラーも問題無しだ。6時に船に行き一応最終点検、特に問題なさそうだ。生ビールな7リッターのタンク、先週交換した5kgの二酸化炭素ボンベ。先週二酸化炭素のボンベを交換していたら側を通った出場者に「さすがにダブルハンドの時は生ビールサーバ降るすのですか？」ときかれ「ボンベ新品に交換です」でずっこけていた。スピンシート関係も見た目ではトラブルなしでセッティングされているようだ。5分後にはっとり到着。ライジャケ、ハーネスをつけて出航準備完了。

5時頃までは風が全く感じられなかったが、予想外に太陽がでて空気も動き出した感じ。北東の風が感じられる。スタート40分前にバースを離れスタート海面に向かう。逗子マリーナには前日から13艇の外来艇が停泊していたが、もうほとんどの船は出航している。参加者の顔も強風の時とは違い緊張はしているものの引きつった様子はない。出

航して10分の位置で一度船を逆転してメインセイルをあげた。初めてダブルハンドに出場した頃はメインをあげるだけだったラットの船で二人だけっていうことに緊張もしたのだけど今はなんてことなくショートハンドでやりのけら



れる。これも成長したってことなのですかね。プレスに乗せた逗子マリーナのパワーボート、レグルスが横を通過していったその時の姿を写真に収めてくれた。あら、フェンダーまだひとつ残っていた。

チェックインを済ませるとかなりの船がもう集まっている様子だった。リミットマークの位置をGPSに記録。スピンスターになるがさて最初沖だしするか、岸よりに行くか。南に変わる予報もあるので沖だしかなと思っていた。スタートが近づくにつれて多くの船がリミットマーク側に集まっている。このレー

スのスタートラインは初島に向けられているのでポート、スターボー入り乱れてのスタートになる可能性あるが、61艇の同時スタート、やはりライン上でポートどいるのは冒険すぎる。スタート6分前には新しいファールーを使ってジブアップしてエンジンを停止した。ラインの本部船側でスタートのポイントを探っていると本部船側から1/3位の所が比較的好いている。2分前に一回転しそのポイントに向かう。10秒前にラインからの距離も残して左右のスペースもある。全開スタートだ。リコール艇を知らせるフラッグとフォーンが本部船に出ている。一瞬ゼネリコかと誤解したが大丈夫だった。悪くない位置で比較的フレッシュな風をつかんでスタートしている。スピニアップの手順も問題なくスピンが上がった。回りにAクラスの旨いスタートをした船もいるが、DEFクラスの船もいる。



スタートして20分、回りの船は、我々より速いクラスばかりになった。いつものクラブレースだったらどんどん先に行ってしまうジュルビアンやジュリアンにも決して走り負けていない。今の所悪いクジは引いていない。スタートしても1時間以上経過しても、oreos, HAURAKI, EBB TIDE, TUPAMAROSSあたりのFクラスの白いスピンの船が風下側を先行している。近くには魁、Saimono Fourと一進一退の展開、きっと相手方は遅いクラスの我々を引き離せなくてイライラしているだろうと話しながら、まじめにトリムと保進を心がける。すぐ後ろも第一花丸やCRESCENTだ。

その内に風が下に触れていき、初島をめざしているとまらんになってしまう。先行するEBB TIDEがジャイブしたようだ、我々も回りより早くジャイブ。魁、ジュルビアンはほぼ同じにジャイブして、ラムライン目指して昇って行く。我々は初島をそのままめざし、ラムラインのちょっと北側を走るようになった。風はだんだん落ちてきてしかも

前に回ってきている。UFOがいち早くスピンからジブに変えて走っている。我々の船はまだスピンの方がパワーがありそう。しかし、結果からするとこの時点でジブに変え、風があるうちに出来るだけラムラインまでのぼしておけば良かったようだ。このまま風があれば初島を12時前に回れるかと思った時、風がどんと落ちてしまった。しかし今年は波がない。我々の船のように7トンを超える船は微風で波があるとぜんぜん進まない。回りのレース艇の重さはわれわれのほぼ半分、少しのパワーでもすぐ加速してくれる。我々の場合、平水でも風を頬で感じだしてから30秒は加速するまでに時間がかかる。波のたびに停まっていたらラチがあかない。

まだこの時点ではしまの北側で距離があったらそう悪い位置ではなかった。しかし、ラムラインあたりからきた



後続艇が島の北側近くを回っていく、我々はその沖でのたうち回る。のたうち回る時間、実に2時間、左の写真だけでも13隻に先行されてしまった。この苦い経験でやっと初島回航のコースの作図が出来たような気がした。来年こそは失敗しないで回りたい。この写真の位置から初島灯台をMag0度に見るまであと54分かかった。ロールコールでZMYCに電話した時はかなりめげていた。前半の優勢をここまでめっちゃめっちゃにしてしまったのは我々のミスだと深く受け止めた。

まるで初島再スタートになったような感じ、それでいて、スタートに出遅れたという状態でスピン

ランに入った。前半とちがって、回りの船はAクラスの船が沢山、Dクラスに花丸も回航でだいぶ苦戦したようだけど、それでも我々の前を走る。スピンランに入った直後はAクラスの船との間も詰まらない状態、生ビール一杯飲んで、おにぎり食べて気をとりのおす。よーし、抜き返そう。我々はロールコールの報告をすっかり落ち込んでしていたが、あとで陸上本部に聞くと、Zephyr速いと感じてくれていたんだって。。。

Fellows, TomBoy, Lion Heart, Zen, AlohaMagic, Tornade, 第一花丸、O&Sなどとジリジリした競い合いが続く。一時間たってもあまり距離がかわらない船もある。しかし、今回は我々のテンションも低くはなかった。先行艇で遠ざかって行く船よりは近づいてくる船の方が多い。後半になって風が落ちてくると我々はジャイブ覚悟で上し気味に走った。スクラッチシートを見ながら、先行艇のセイルナンバーが見えると同クラスか確認し、レイティングで負けている船には必死でスピード維持して上った。フィニッシュラインが見えてきた所でも何艇か捕らえることが出来た。一発目のジャイブはうまく決まったがこのタックではフィニッシュできない。フィニッシュラインの手前で最後のジャイブ。BクラスのO&Sの直前を通ったが、焦ったジャイブは失敗、フォアステーにスピンからめながらO&Sの24秒後にフィニッシュ。うーん、修行が足りない。

確認出来ていない、ライバル艇が沢山ある。初島の失敗がそう簡単に取り返せたとも思えない。しかし、本部艇からは「今年は早かったねえ」と声がかかる。なぜか疑心暗鬼になる。特に普段からのライバル、朝星の行方が分からない。初島で抜かれた可能性もある。セイルを片付けてからフィニッシュラインの回りをウロウロ。朝星のスピンを見つけてやっとほっとした。よってきたラバーボートに生ビールのプレゼントをして、夕方の軽風を楽しみながら



焼けた肌に受ける西日をさかんにしてビールを楽しんだ。10時間17分のレースはやはり今年も面白かったし、フィニッシュ手前からすでに来年の話しをしていた。

10時間以上たってもフィニッシュ手前で接戦をくり返す。今年は過去のレースの中でも1, 2を争う好コンディションだった。我々の船にとっても相模湾全体にイヤな波が無かったのが幸いした。スプレーをかぶることも一度も無かったのだが耳を触ると汗の塩がしっかりと結晶になっていた。

ハーバーに戻っても、コミッティーの連中はあまり成績に関する話しをして来ない。そんな雰囲気からするとどうやら悪くはないようだ、このレースに挑戦しての初めての入賞が可能かもしれない。「入賞したら泣いちゃうかもしれない」なんて言ったりしたものだから、回りもちょっと気をつけている。こちらも成績の事はふれないでおこう。

最終艇のフィニッシュは、20時12分、ドンちゃんだった。船齢56年の木造船が見事に美しい姿でフィニッシュした。乗員は狭いデッキで13時間12分、お疲れ様でした。ハーバーに帰ってきた二人を迎えたが、来年の挑戦は明言していなかった。本部船のメンバーが帰ってきた所で、コミッティー飯のカレーライスが振る舞われた。初島回航の辛い話しをさかんに飲んだ酒も回り、私は21時半頃にはもう電池切れ。ひとり早く部屋にもどり轟沈したのであります。

翌日の表彰式、ダブルハンドレースでの初めての入賞をクラスC、2位でかざる事ができました。嬉しい瞬間でした。今年も悔いが残るレースでした。優勝するまでは悔いが残るでしょう。来年もまた頑張っレースをします。来年入賞出来る保証はなにもありません。入賞はそう簡単ではないのです。走りきることだけだって大変なことでもあるのですからね。参加した61艇すべてにそれぞれのドラマがあるのでしょう。今年はコンディションが良かったのであまり冒険という感じはなかったかもしれませんが、二人でレース



にするということは、責任の所在がとてもはっきりしていて、ひとつひとつのアクションが結果と結びついているということをお人数でするレースよりずっとずっと肌で感じられるのです。そんな時間は社会の中でもそう味わえる物ではないので皆さんこのレースに挑戦し続けるのでしょう。冒険という言葉ではない魅力もこのレースにはあるのですね。